



山田ハシノツヨル

セイタヒニ

生産性向上や時間短縮のため、現在多くのユーザーがロボットによる溶接自動化に取り組んでいる。そんななか、山田マシンツール（東京・台東区）はタイの雅英社長（右）がロボットを使用した溶接自動化ラインを組み上げた。日本でも試行錯誤が多い自動化

びた詳細に
いて、同社
エンジニア
シングス-ペ
接を担うロボットが42
基配置され、ハイテン
材の溶接を効率的に進
めている。クライアン
トの要望により、溶接
機とロボットにはダイ
ヘン製を採用した。ワ
ークの投入など一部は

自動車溶接工程の自動化 海外の溶接ライン立ち上げ苦労

ソフトウェア全般など
の機能やノウハウに關
わる部分は自社スタッフ
が担当し、組み立て
作業などの人手を要す
る部分は現地の協力会
社が担つた。
このプロジェクトに
当社が選ばれた背景に

に於て、従う比較的安定した収益源があるため、エンジニアを育成しつつ受注プロジェクトを厳選し、したうえで内製工程も付加価値部分に集中し、安定した事業運営体制を維持してきた。また、日本人担当者

造の自動化に関する引き合いが増えていくばかり、日本の自動車メーカーなどからも問い合わせが寄せられている。今後同様のプロジェクトにおいては、ロボット導入時のティーチング負担の軽減が課題となる。カメラやレ

るという予測もある。当社は安定した事業運営性という利点と、今回のプロジェクトで得た知識と技術を生かし、タイ市場の拡大に貢献するだけでなく、他国や日本にも還元していくことをしたい。

イのチヨンブリー県において、全長約100kmにわたる新たな自動化ラインを構築し、ピックアップトラック用シャーシフレームを製造している日系企業に納入した。このラインを行うもので、かく同溶接ライン向け熱手作業で行うか、工場のほとんどが自動化されている。

社スタッフの約40人、
計50人の陣容にて4カ
月の短納期を実現し
た。メカ設計、制御盤
の設計・組み立てや、
各種調整を一貫して請
け負ったが、特に設計
と電気ハード部製作、

は、クライアントとの
長年の関係性のみなら
ず、Sier（システム
マインテグレータ）と
いう変動の大きい事業
の継続性を担保する社
内体制がある。当社は、
工具や環境機器を取り

が溶接部品メー方にて
生産技術者として働い
ていた経緯から、検討
段階から客先の生産技
術面での検討支援を行
うとともに、前職での
コネクションを通じて
必要な熟練工を集めた
ことで、ライン構築が

サを活用したルートの自動検出など、タイ国内で関心が高まっていいる技術を用いたシステム構築を進めたいたいと考えている。

THE JOURNAL OF CLIMATE

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三